

平成26年度国立天文台研究集会開催報告書

平成27年4月30日

国立天文台長 殿

代表者	氏 名	(ふりがな) さいとう よしひこ 齊藤 嘉彦		
	所属・職	東京工業大学・特任助教		
	電話	03-5734-2388	E-mail	saitoys@hp.phys.titech.ac.jp
研究集会名	第5回 光赤外線天文学大学間連携ワークショップ			
開催期間	平成 27 年 1 月 7 日 ～ 平成 27 年 1 月 8 日			
開催場所	東京工業大学 大岡山キャンパス			
参加人数	56名			
研究集会の概要	2011年度より始まった「大学間連携による光・赤外線天文学研究教育拠点のネットワーク構築」事業では、光学赤外線による多地点・多機能な突発天体のフォローアップ観測のネットワークを構築することを目的としている。 この事業が始まって以来、異なる大学・異なる専門分野の研究者が連携して研究あるいは教育を進める連携観測・教育ネットワークとして OISTER(Optical and Infrared Synergetic Telescopes for Education and Research)の体制を整備してきた。これらの活動の成果報告と進捗を確認するためのワークショップをおよそ1年に1度開催しており、今回は5回目となるワークショップである。 過去3年間のワークショップでは、内部の体制を整えることを重点課題としていたため、本連携事業に関わる機関からの参加者のみに限定してきた。 今回は初めて、天文学のコミュニティ全体への開催通知と講演募集を行い、連携外機関の研究者や学生の参加を受け入れ、OISTERの活動に興味を持つ研究者や学生に広く現在の成果について知ってもらうよう配慮した。 多様な専門分野の研究者が集まるこの機会を生かし、専門知識の共有と教育的視点から、研究テーマのレビューを主眼においた招待講演5件を行った。また、VLBI大学間連携との合同開催した日本天文学会秋期年会の特別セッションに引き続き、電波と光赤外線を含めた多波長連携についての議論を始め、今後の事業の進め方や方向性に関わる総合的な活動の報告を行った。 口頭講演31件、ポスター4件、56名の参加者のうち、学生は18名であった。			

研究集会の成果

本事業としては、光赤外のコミュニティに初めて公開するワークショップであることから、簡単な趣旨説明から始めた。その後、この事業の狙う突発天体の観測として、即時対応が求められるガンマ線バースト、数日単位のFermiやSuzakuなどの天文衛星と連携したAGNモニター、数ヶ月単位の長期間にわたって観測を続ける超新星など招待講演2件を含む6件のサイエンス講演があり、時間を超過する活発な質疑があった。1日目の後半は、さらなる広域の連携として共同観測を始めた大学VLBI連携の話題や、ここ数年で建設や運用が開始する東京大学6.5m、京都大学3.8mの新しい望遠鏡について講演があり、近い将来のより一層の発展が期待できる内容であった。1日目の最後には、本事業で進めてきた待望の共通自動解析パイプラインについて報告があり、来年度早々に各機関へ配布することとなった。

2日目は、海外機関からの招待講演として彗星の観測的研究や、月食の偏光観測など、参加する多くの方に馴染みの薄い分野について講演があった。自身の専門分野に共通すること、天文現象としての単純な面白さや新しい発見もあった。また、全天X線監視装置MAXIで新たに発見した天体の地上観測フォローアップについて報告があり、スペースや地上のサーベイ望遠鏡との連携について意見が交わされた。

本事業で推進する教育プログラムの成果報告が、口頭で4件、ポスターで1件あった。所属機関では経験できない観測や知識を、連携する大学で学ぶことが狙いである。本ワークショップは、対象となる学生の口頭講演の場として考えていた、しかし、開催時期が1月であったため、やむをえずポスターのみとなった方もいた。来年度以降の開催時期は学生がより参加しやすい時期を設定したい。

2日目午後は、連携機関の年間報告を参加機関の年間の活動報告を行い、最後に議論の時間を設けた。6年間の計画でスタートした事業も後半の3年に入ってから初めてのワークショップということもあり、事業全体の成果をどのようにまとめるかを決めるための議論や事業自体を今後につなげていくための議論を行った。

過去3年のワークショップでは運営上の不備やその改善について話し合うことが主であったが、今回は論文として実を結びそうな具体的研究成果や軌道に乗り始めた短期滞在型の学生教育プログラムの報告、また連携機関で共通して使用するためのデータ解析パイプラインの開発に関する報告など次第に形になり始めた活動について話し合うことが出来た。連携外の研究者や学生にもそれらの活動について知ってもらうための良い機会となった。

その他参考 となる事項 (希望事項も 含む)	会場を選定した際には、施設利用費を必要としない予定であった。後に会場の正式な借用手続きに入った際に利用費が必要とわかった。その時点で他の適切な会場に変更できなかったため、節約可能と考えていた施設利用費がかかってしまった。
---	---